

令和4年10月1日に思う

「新しい出会い、つながりを求めること」は、村の最重要施策であります。今年の夏も、多くの学生が本村に滞在しました。双方に大きな成果があったと思います。

地域づくりインターン事業は、本村では平成10年から始めています。この事業は、「村づくりを体感し、都会では気づかない新たな視点を得ることで地域空間を活かす人材を育成すること」を目的としたもので、今年はベトナムからの留学生など5人が14日間滞在。その内容は、水源地の森トレッキング、らいふの移動スーパー体験や村民のコミュニティへの参加などでした。

一方、ふるさとワーキングホリデーは総務省所管事業で、都市に暮らす若者が「一定の期間地域に滞在して働きながら、行政や地域の人との交流を通じて、地域の魅力を伝え、関わりを深めていくこと」で、今年は10人の若者が14日間、二班に分かれて活動しました。

また今年は、北九州市立大学地域創生学群の学生たちが授業の一環で、水源地の村づくりを題材に事前に複数回のオンライン学習を重ね来村。村の課題である「質のいい関係人口の確保と村民とつながる仕組みを作るには」などに対し解決策を提案してもらいました。

このほか恒例の奈良女子大学剣道部の合宿や人間環境大学(愛知県)の学生たちも滞在し、水源地の村づくりを学んでいただきました。

ここで学生の声です。「源流の村の魅力を肌で感じた。村民がいきいきと働き、助け合って暮らしている姿は逞しく、かつ優しさ、温かさに感動した。生きる糧をもらった」等々。

今後は、学生と村民とのつながりをさらに深めていきたいと考えています。